

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 2 日現在

機関番号：33901

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23652015

研究課題名(和文) 教養概念の文化横断的研究 - その変容過程を中心に -

研究課題名(英文) A Crosscultural Study on the idea of 'cultivation' and its metamorphosis

研究代表者

下野 正俊 (SHIMONO, Masatoshi)

愛知大学・文学部・教授

研究者番号：70262053

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円、(間接経費) 870,000円

研究成果の概要(和文)：この研究では、教養として学ぶべきと考えられた一群のテキストがどのように選ばれ、どのように教育されてきたのか、東アジアと西欧を対象に歴史的に論じた。この結果「教養世界」という概念に到達した。

教養世界は、1. 文献世界と2. 生活教養の二つのレベルに大別される。テキストとその解釈からなる文献世界と、身体統御の技法と教育からなる生活教養とが有機的に結合することで教養世界になるのである。

我々は一方ではこのような制度について、哲学、情報学の見地から原理的に考察した。また他方では制度の実際を詳細に記述する歴史学的探求とを行った。加えて、大学の教養教育の今後について、一定の提言をなし得る知見を獲得した。

研究成果の概要(英文)：In this joint research we made a comparative study on the difference between East Asian culture and western culture focusing on the social mechanism of the way in which a group of texts has been approved and educated as classics. As a result, we have acquired the concept 'the world of cultivation'.

'The world of cultivation' consists of two elements - one is 'the world of literature', the other, 'the cultivation of the life world'. The former is based upon the classical texts and commentaries, the latter, the methods of disciplining one's body and the codes and modes of behaviors. The organic links between the m will put 'the world of cultivation' into reality.

We have discussed the some theoretical aspects of 'the world of cultivation' from the viewpoints of philosophy and information science and accumulated some pieces of information on the historical, concrete facts of 'the cultivation of the life world'. The study also suggests the future of liberal arts education in universities.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：比較思想史 教養 読書実践 書画 女子教育 和菓子 オントロジー

1. 研究開始当初の背景

本研究の参加者の間で共有されていた問題関心は、それぞれの専門分野で日常の教育活動に従事しつつ、今日の大学教育という一層大きな状況に対して応分に寄与したい、ということであった。我々は人文科学教育に携わっているのであるから、人文科学教育においてこれまでもっとも包括的とされてきた目標、すなわち教養教育を主題とし、「教養」という概念を明瞭に規定することによって、我々なりの寄与がなしうると考えた。

この概念は、かつては確かに高等教育を主導したが、今日(1980年代の英米を中心として実施された経済的新自由主義に基づく高等教育政策、我が国における大学教養部解体などを経て)その意義はさしあたり見失われ、心情的支持も、それを担保する実定的な制度もほぼ崩壊している。しかも、これに換わる新たな示導理念が(少なくともある程度以上の一般性をもって)共有されているとはいまだ言い難い。このような状況に直面しつつ、なお教育実践に従事する者として、我々は大学人としてこの概念の帰趨に対して関心を持たないわけにはいかない。同時にまた、研究上の観点からも、この概念を対象に、東西比較思想史を軸にしてそこに日本文化史、さらには今日的な哲学、情報学の成果を加味するならば、豊かな結果が期待できるように思われた。我々は、これらの理由から、「教養」概念をめぐる共同研究の可能性を検討した。その結果、1980年代以降急速に進んだ人文科学の方法論的变化(洗練、とも言えよう。本項(2)参照)の成果を適宜用いることで、今日的な教養論を構築できるのではないかと考えた。このような準備段階を経て、我々は、「教養」をキーワードにそれぞれの研究を有機的に連関させ、共同研究を遂行することとした。

すなわち、本研究の開始にあたり、共有されていた状況認識は次の二つである。

(1) 既に述べたように、主として欧米の大学が新自由主義的政策の下で1970年代後半から1980年代にかけて経験し、遅れて我が国が1991年のいわゆる大綱化以後直面することになった、人文系カリキュラムの切り捨てとその後のカリキュラム改革の迷走という状況である。我々は、こうした状況に大学人として対応すべく、教養とは何であるのか、という問いを寄せざるをえなかった。そもそも、人間の知的に十全な発達の表徴として「教養ある」という形容詞が用いられるのであれば、高等教育機関としての大学はそれと無縁ではあり得ない。さらに教養の内実は時代と共に変化するものである。にもかかわらず、教養の変化の諸相とメカニズム、来るべき教養の内容、いずれに関しても(国内外においてなされた大学論を管見する限りでは)未だ曖昧な認識しかない、というのが、偽らざる現状であろう。要するに、大学において

人文科学教育を担当する教員たちは、何を教えればいいのか、わからなくなっているのである。

(2) 次いで考慮されるべきは、1960年代以後とりわけ1980年代に顕著になった、人文科学における学際化と方法的変貌という状況である。前者の意義、実態等については、贅言を要しないであろう。後者について言えば、構造主義、ポスト・モダニズム、ジェンダー論、ポストコロニアリズムといった、人文科学内部における(自己言及的=自己破壊的)理論展開を軸に、それまでの教養に対する常識的な理解(いわゆる教養主義)が相対化され、旧来の人文科学の諸成果について否定的な評価がアカデミズムを覆うようになって久しい。20世紀の最後の20年間で人文科学全体が大きな組み替えの時期を迎え、それはまだ完了してはいないのである。この時期に、我々は人文科学のできるだけ広範な分野・領域に対して用いることのできる概念を提示したいと考え、「教養」を主題として選ぶに至った。

2. 研究の目的

本研究着手にあたり、我々は、前項の状況認識を踏まえ、以下の作業仮説を立てた。

「一群のテキストを中心に、その周囲の有形・無形の知識が教養と認定され、その再生産のために、文化相対的な広義の教育制度が整備される。他方で、社会的諸環境の変化により教養の内実は次第に変化を余儀なくされる。教育制度はそれに対して、常に事後的な対応を強いられる。すなわち、教養は全体としてホーリスティックな現象であるが、それは周辺領域から変化し、やがては中核が遷移・変質する。」

この仮説に基づき、本研究は教養の変化の諸相並びにメカニズムを解明し、統一的なモデルを提示することを目的とした。

このモデルは、以下の三つの契機からなる。ある時代・地域における教養の内実の確定。

教養が維持されるための制度、とりわけ身体性と関連づけた、(広義の)教育制度の探求。

、 についての哲学、情報学からなされる一般化、理論化。

3. 研究の方法

前項の目的を達成するために、本研究は人文科学の多彩な領域を包括する学際的な研究たることを目指した。そこで、研究代表者、分担者四名の研究対象のうち、交錯する領域、対象をベースに、共同研究を実質化する点に、もっとも配慮された。

具体的には下野のドイツ啓蒙期の哲学史研究と木島の中国思想文化史研究を軸とし、

西洋と東アジアにおける教養現象に関して、モノグラフィーを蓄積する。そしてこれを通じて西洋と東アジアにおける教養を対比する。この軸に対して、須川が近代日本の女子教育-これは「ふるまいの馴致」という意味で、次項で述べる「生活教養」についての研究成果である-に関する実証的研究を付加する。これらの成果が思弁性を免れるために、山本が情報学の観点から、情報一般の生成、表象、伝承、蓄積といった分野における今日の情報理論の水準を示し、体系化に寄与する。このような方針の下、研究が遂行された。

この研究は主として文献に依拠したものであったが、本研究が単なる文献に閉ざされた研究であることを免れるべく、次の二点に留意したことを特筆しておきたい。

(1) 本研究は(この点は上記「生活教養」概念に結実することになったが)西洋、東アジア、日本における教養を媒介する具体的な事物(建築、書画、食文化等)とそれに関わる、身体統御をベースにしたプラクシスという観点を堅持した。

(2) (1)と関連して、金沢、札幌、香港と、生活教養と教養教育において特徴的な地域に足を運び、その実際を検分すると同時に現地の研究者等から情報提供を受けた。学際性、領域の多様性、事物と身体統御に関する具体性についての配慮が、本研究の方法上の特色である。

4. 研究成果

本研究の根本的な立場は、教養は一般に「文献世界」と「生活教養」とからなる、という認識である。以下、この二契機についての知見を紹介する形で本研究全体の成果を概観し、その後、各人の成果についてそれぞれの自己評価を記すことにしたい。

(「」で囲んだ語は、本研究の成果として得られた概念を示す。それらは本研究独自の術語である。)

(1) 「文献世界」について

一群の有価値的(=権威的と表象される)テキストとしての「文献世界」について、西洋思想においてはテキストが明確な形でコルプスとして体系されたことはないが、東洋思想においてはコルプスやカノン(正典)が明確に決定されている。

東洋思想では、コルプスにおける解釈のヒエラルヒーが確定的かつ体系的である。従って、テキスト解釈の結果として得られる認識の真理性はコルプス内部で確証される。

これに対して、西洋思想においては、テキスト解釈の自由度が高い故に、新たな解釈の真理性を担保するため、コルプスの外部が想定される。

この意味で、東洋思想が閉じたシステムをもち、テキストの権威性はシステム内部

で決定されるのに対して、西洋思想ではテキストの外部に、存在論的に権威性の源泉が想定される。この真理について、東洋思想は文献内在的であるのに対して、西洋思想においては文献外在的であり、その意味において存在論的である。(「存在論的真理」)

(2) 「生活教養」について

「生活教養」は、身体統御まで含め、日常性を規定しその実質をなすものであり、その点で教養世界を根柢から支えるものである。

(1)で示した「文献世界」について、それらが伴う権威表象は、実はこの生活教養の教育、維持、変化の過程に即して考えられるべき表象である。

「生活教養」は、フッサール現象学という生活世界の実質をなすものとして、現象学的研究の対象であるべき、基底的な次元である

各人の成果

下野は、主として近代ヨーロッパ思想史を対象に、教養現象について制度論的に研究した。また、本研究後半では、現象学的方法の適用可能性を模索した。このようにして、上で概略を述べたような、本研究の理論化の部分を主として担った。下野単独の研究成果としては、以下が挙げられる。

(1) ドイツ啓蒙主義を中心にして、西洋思想における教養とその制度的基盤の研究を行った。研究の端緒として、18世紀ケーニヒスベルク大学におけるアリストテレス主義の帰趨を主題とし、この時代この地域の哲学・神学的教養(ピエティズム)の維持機構を大学におけるカリキュラムの変遷という観点から理解すべく、文献収集、考察を行った。

なお、この過程で、この時期、1755年にリスボンで発生した地震に対する思想動向をカントを中心にまとめ、自然災害をきっかけとした思想上の変動について報告し、論文にまとめた(雑誌論文)。このことにより、ある特定の史実から偶然的に教養体系の変化が生じる可能性を示唆することができた。

(2) その後、この時期の読書プラクシス、とりわけ「読書サークル」(上層市民の間で頻繁に見られた現象)と高等教育の関連について、相当に実証的な研究を行った。

(3) 同時に、平成25年度の研究完結に向けてこれまでの成果を理論化する作業に着手した。それは、本研究の中間報告として口頭発表された。この発表は、「変化する教養」を鍵概念に、人文分野の、主として高等教育機関における教育・研究内容の変化に関するいくつかの史実を紹介しながら、それを

知識社会的に理論化しようとしたものであるが、同時に、今後の大学人文教育におけるカリキュラム改革の可能性を検討することにもつながった。

このときの考察を基に、下野は、研究を総括し、同時に今後の研究継続にあたっての理論的基盤を確保するべく努力した。とりわけ、「生活教養」、「存在論的真理」の二概念についての理論的考察につとめ、フッサール現象学の概念である「基づけ」を用いて説明することを試みた(雑誌論文)。

木島は、中国思想、なかんずく東アジアの漢文文化圏における「教養世界」について研究を進めた。木島担当部分として、「美術における教養概念」を中心に述べる。

はじめに、東洋的教養にかかわる基本事項を確認しておく。

(1) 教養のオーソライズ

文献教養が、東洋ではオーソライズされている。まず正史と呼ばれる政府公認の史書の中で書目というかたちで最重要書籍(経書)が認定され、それ以外の書籍に関しても書目に掲載されることで重要書籍として認定される。このような認定は、科学の出題範囲、および官製文献全集である四庫全書への所収などのかたちでオーソライズされており、文化人(=政治家=学者)であるためにはそれらを、最重要のものに関しては暗記を、それ以外のものに関しても理解することが求められていた。そしてこの条件が理念ではなく、試験(科学)という形でチェックされていた点も重要である(雑誌論文)。

(2) 文献教養の普遍性

文献教養(漢文)は文字情報であり、口頭言語であることを要しない。口頭言語の発音は、中国内だけでも差違が大きい、国外の漢文学習者との間でもははや、口頭の音声のみでは情報を共有することが難しい。しかし逆に言えば、漢文は文字情報として、東洋世界で普遍的に共有されていた。文字面だけに限れば、東洋文献世界は一体であった。

(3) 文献教養の蓄積と「場」

文献教養は、四庫全書などに採録された重要古典に加え、後人が作成した典籍や題跋などの批評が随時文化人界に還流され、それらが蓄積とともに双方向的に交流され、一方向的な蓄積、放流ではなく、双方向的なやりとりが可能な文化交流の「場」が形成されていた。

(4) 文献教養の文化界全体の中での位置

文献教養が文化現象の中で唯一オーソライズされていることにも明らかなように、文献教養が文化活動全体の中で最も高い位置を占めている。また主題・画像などあらゆる面で、文献教養から諸多の文化現象への流出

が顕著に見られる。諸多の芸術は、文献教養からの流出を受け入れることで自らの権威付けを行っている。

(また補足として以下の点も確認しておく。)

(5) 時間比較と空間比較

現代の東洋は、東洋的伝統に則りながらも、現実的には、西洋発祥の近代文明に所属している。すなわち東洋的教養は、各所に残存するとはいえ、現代東洋人の嗜好は汎世界的もしくは亜西洋的なものとなっており、伝統東洋的芸術の受容が遅れている。

(6) 文献教養と生活教養

本科研費の成果として提唱される「生活教養」は、文献教養の応用末端としてではなく、文献教養とは切り離された中で醸成されてきた別体系の教養である。したがって、工芸品などの造形芸術の理解には、二種の教養に立脚することが必要であり、困難を免れ得ない。この違いを強引に一体化すると「民芸」というような心情に訴えるだけの非合理的な末路をたどりかねないので注意を要する。

(7) 美術における東洋的教養

美術における教養の働き 1: 主題提供

造形芸術における教養の働きとして最も判りやすいのは、文献に記された物語やシーンを造形化する場合である。蘇軾の「前赤壁賦」を絵画として描いた場合などがこれにあたる。このような仕組みは「ミケランジェロ作ダヴィデ像」など、西洋芸術においても普通に見られるものであり、東洋の特色とはいえない。

美術における教養の働き 2: 間作品性における先行作品

二つ目の仕組みとして、作品自体が非文献的教養となる場合である。新しく作品が作られる場合には、専攻作品が意識され、主題へのアプローチとともに、専攻作品との関係も意識される。「瀟湘八景」などでは景地の実景を写し撮ることよりも、先行する作品との関係に強い関心が払われながら新作品が制作される。このような関係にあっては、作品自体が後継作品にとって許容的役割を果たすことになる。

美術における教養の働き 3: 意識対象としての鑑賞コメント

東洋芸術の大きな特色として、鑑賞者の記すコメントが次作品の制作および鑑賞に大きな影響を与えるという事態がある。鑑賞にあたって、造形作品が圧倒的に強く優位な立場にあるのではなく、むしろ作品は鑑賞者のコメントを引き出すための契機の一つの役割を果たすだけの場合すらある。この場合 1 で述べたような、主題文献の作者でもなく、2 で述べた造形作家でもなく、第三の立場にある鑑賞者のコメントが教養の役割を果た

している。造形作家も鑑賞者も、文献教養並びに作品教養の作り出す「鑑賞場」の中に身を置いて制作行為ならびに鑑賞行為を行う。造形作品は単に造形作家の孤立した制作行為に依って生み出されるのではなく、鑑賞コメントによって醸成された「鑑賞場」が生み出すと言ってよい。

(8) 教養の承受と構築

東洋造形芸術における教養の働きの分析の結果、これまで一般的に理解されてきた「教養」概念に対して、以下のような相違点が明らかになった。

教養は固定的に所与のものではなく、随時新たな要素の追加によって、蓄積変遷する。教養は与えられるものではなく構築してゆくものである。

時代と場所を問わず、鑑賞者が題跋などを通して適切な形で造形作品と関わることにより、教養構築者として鑑賞場に参与できる。すなわち鑑賞者は、造形作家と同等の影響を持つ（雑誌論文）。

美術作品は題跋の存在によって造形芸術から解放され、総合文化活動の一部となった。（美術史ではなく、文化現象の一部）

東洋芸術は、造形芸術特有の普遍性に加え、文献教養の普遍性ゆえに、後世の異国人も芸術活動に正当な権利を持って参与できる仕組みとなっている。

鑑賞場を尊重し、それを縦横に機能させて芸術を成立させる仕組みは、「連歌」など東洋の芸術によくある手法である。

須川は、日本の近代女子教育における料理教育、とりわけ菓子作りの分野に着目し、その教養における階層的構造を明らかにした。

明治期は近代家族の形成によって家事に対する価値観の大転換がおこり家事は家政と改称され、家事の主軸は裁縫から料理へ移行した。それに伴い近代女性の教養に料理が加わりその教育が模索され、家政テキストの発行や料理講習会の開催、料理学校開校等が相次いだ時代であるが、公の教育機関が介する家政教育は実用との乖離が著しく実用的ではなかったとの先行研究がある。しかし教育機関で家政を学ぶ階層の女子は実用性を求めてはならず、実用を伴わない教養教育で不足なかったという。このような点は雑誌論文で、実用的な料理情報を必要とする女子は新聞、雑誌に掲載された料理記事にそれを求めた点は雑誌論文でそれぞれ報告を行った。その中間的な菓子情報の利用状況として雑誌論文で商家の嫁の日記の分析結果を公表した。以下に各報告の概要を示す。

(1) 雑誌論文においては、明治期の家政学テキストの分析を行なった。当時の家政学テキストは欧米の当該テキストの翻訳が先行しており、実用的でないものであった。

しかし、これらのテキストを介して家政教育を受けた女子は上層階級のものであり、実用性を求めてはならずあくまでも一知識として家政を学んでいたといえる。広い階層にまで女子教育が広まるにつれ、日本人女性による家政書が執筆され、そこでは実用性が強調された。

このようにして、「家政は科学である」との理念のもとに家政教育が展開されていた。しかし、教育機関のテキストは実用性を目指してはいるが、科学知識、理論の展開に多くを裂き、実用に即結びつくものとは言いきれない部分が多い。そういった知識としての家政情報を得たい階層には受け入れられた教育方法であったであろう。さらに、このような家政教育が家政教師、家政研究者を生み出したともいえる。

(2) 家政テキストの知識的な情報で満足できない、生活に事足りない者や教育機関で教育を受けない女子の情報源については雑誌論文にて分析した。料理記事変遷には読者の投稿が反映され、実用性を求める婦女子の要求を満たす情報源としての地位を確立して行く過程がみられた。近世以前の料理流派の流れを汲む家系筋の料理記事までもが、本膳的な料理の家庭向き工夫といった傾向の料理を書くようになっていく。

菓子関係記事では、菓子屋に発注することが主であった行事菓子の家庭での作り方（少量生産、簡易法）家庭で製作できる西洋菓子の製法（入手可能な材料、日本語表記）、水菓子（果物）の工夫等が掲載され、菓子製作が家庭内へ導入を促すものとなっている。

(3) 雑誌論文では教育機関で家政教育を受け、年若い嫁の立場にある商家の女性の日記から、教育で得た教養的知識と実生活での実用的家政の実態を分析した。このような立場の女性の中に、教養と実用の中間的な意味での趣味としての家政（料理、菓子づくり）が芽生え始めていることが明確になった。

山本は、主としてそれぞれの論文執筆時に情報学者の立場から助言を与えるという形で本研究の遂行に貢献した。研究期間を通じて、それぞれの成果には山本から提供された知見が反映している。一例を挙げると、電子書籍の技術の現状と市場の実態の紹介、ネットワーク文化の状況の紹介記録媒体の変化とそれがもたらす帰結についての考察などである。これ以外にも、情報学におけるオントロジー研究の現状について証言は貴重であり、他の研究参加者が披瀝されるところ大であった。確かに、個別の論文などの成果に結びつくことはなかったが、むしろ本研究のほとんど全ての局面で山本の参加が重要な意味を持った。このことは、特筆すべき点であろう。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

下野正俊 「新しい教養論の構築に向けて-方法的序説(1)-」 文学論叢、愛知大学文学会編、査読無、第149巻、2014、pp.209-232

木島史雄 「美は孤ならず-鑑賞者は「伏生授經圖」をいかに楽しんだか-」 文学論叢、愛知大学文学会編、査読無、第149巻、2014、pp.82-116

須川妙子 「明治期の料理の情報源としての新聞記事」 研究論集、愛知大学短期大学部編、査読無、第36巻、2013、pp.17-33

木島史雄 「初唐におけるモジュール的思考について-類書・正義そして楷書-」 中国思想研究、中国哲学史研究会編、査読無、第34巻、2013、pp.208-229

須川妙子 「明治期の女子教育における実践的な教養としての家政学の確立」 研究論集、愛知大学短期大学部編、査読無、第35巻、2012、pp.122-144

下野正俊 「11.1から3.11へ-リスボンから福島へ-」 文学論叢、愛知大学文学会編、査読無、第145巻、2012、pp.189-210

須川妙子 「明治末期の京都における菓子利用の様式」 研究論集、愛知大学短期大学部編、査読無、第34巻、2011、pp.93-124

〔学会発表〕(計3件)

木島史雄 「Sugerius と欧陽詢-中世のパリと初唐中国における芸術と学術の平行現象-」 日仏東洋学会、平成25年3月31日、鳥取大学

下野正俊 「教養概念の文化横断的研究-その変容過程を中心に-」 人文社会学と現代に関する研究会、平成25年3月29日、愛知大学

下野正俊 「11.1から3.11へ-リスボンから福島へ-」 三重大学哲学会、平成23年7月13日、三重大学

6. 研究組織

(1)研究代表者

下野 正俊 (SHIMONO, Masatoshi)

愛知大学・文学部・教授

研究者番号：70262053

(2)研究分担者

木島 史雄 (KISHIMA, Fumio)

愛知大学・現代中国学部・准教授

研究者番号：50243093

須川 妙子 (SUGAWA, Taeko)

愛知大学短期大学部・ライフデザイン総合学科・教授

研究者番号：40342125

山本 昭 (YAMAMOTO, Akira)

愛知大学・文学部・准教授

研究者番号：50269304